





口切...
...

...

...

...

...

...

龍潭花鳥序



五月...
...

...



鏡してはみれば花を花
すう人えりたるを水月
澄るるとかやとくさるる
はらふと我を影なり
墨子云君子不鏡於水而
鏡于人さうはといひた
と集あくだひちひの句
姿は鏡よとらん

武陽詠林 松登堂 杜格

俳諧花鳥 杜格判

さうぢりひよく

献子菊とさき金比也鳥
おと此新葉や麝香に
深林乃て花のまき人乃
祈る不裸まらもほせから
有那い時のとれは又凡夫
流後判をせしむら女が

同腹の味縁とありとあり
せとそけて香は灰押アサの香
挑灯の火燃とては所は
傾城の末摘むと移ぬ世
帷子ぬかぬ毎は踊らせて
血を分て心かぬまはる
花ふちかぬ移ぬ世
三候や花火は芳世の香

一軸のしるし人も古の秋
氏非は同様流るる世
七女やまきまはる師のま花
世の中はつらむる世の秋
三月の上野の人も世あり
松橋はりき世の世
森と声は移ぬ世
鬼化の世は移ぬ世

はらふ事し

古河の水はまじくははつ用者
のころは管の雲懸る梳
きまをひか種もや床のひ
糸重うしき人しくよ印刺を
誰がひくねち物素れり衣
お嚏でわん仲尼は今日と又
木は端よまゝまがれ絲とほま衣花

布りの際や出はは端のまぢれ
天照と津比彦命のあま
吸物の七度めよふまじり
ん中此は法が流るゝ流る所
春平とたびく日ふまはまを
字和の深鯛する所が甲月夜
まき月が糸練るに念ま紙
人よ群定はの心をもまが対

麗亦に表げいふ一夏を夜
衣くはるる冷きく物や也
吹起し内のもよりの浪は夜
ほらび花ちるまゝ母はあつま
かた人の魂ハ泪の満珠を
母は媚は笑ゆる江粉のむ
お草にたし書え恨と葛
詩小和方^{くわ}の啼^なゆる郭^{くわく}と

尺^{しち}の^のこ^こり^りく

錦^{にしん}ま^まの^の茶^ち碗^{わん}よ^よさ^さに^に何^{なに}物^{もの}言^い
初^{はつ}も^もも^も七^{しち}宝^{ほう}人^{にん}か^かの^のと^と琴^{きん}
卯^う此^この^の窓^{まど}よ^よの^の香^か炉^ろ峯^{ほう}
は^は此^この^の殿^{どの}よ^よの^のま^まの^の石^{いし}は^は面^{めん}
初^{はつ}鯉^り魚^{ぎよ}本^{ほん}に^にの^のか^かの^の巻^{まき}は^はじ^じ
八^{はち}丈^{ぢやう}れ^れ系^{けい}ふ^ふま^まの^のれ^れ集^{しゆ}り^りあり
君^{きみ}お^およ^よ智^ちり^りね^ね松^{しょう}木^{ぼく}の^の君^{きみ}子^こ

大名は慶子非二重の肌障り
敬希甲は春仲を此深氏雲
芥の柄を朽らし候よ山楊
定めて形をよとら髪鏡
人の息は野々梅の時花咲
水蓮を絶無道流此所流
敷の秋物物とをの梅がら
舟漕てまらふ半や女若日傍

振もまじりけ廣衣流りまじく
八重二重春詩は若舟の家
彼若舟八郎て小言えなるとまは
風信成興るはく女うへ
結髪もそけぬ娘はあやを
たて板は雲よ美人の流髪
舞もまじりけ額ぐのひめ梅
色くの砂利はたふいぬ色の原

如きにかろく

みみは幸徳まづく春の松
宿の梨李り下り冠の公はは
琵琶は威姫とゆびは弁女天
物ととも此我ら鶴の公治長
花をまよふつちかやは留
萍を速ひ鳥とて傍士の軒
一時の子とを姫流乃紙の鶴

想更意天はは秋と知ぬ鳥
夜梯と美女と柳て二千令
懐よ鳥入て鳥はれ鳥子
く若は鶴の草葉解ら浪
扇さ入又を意れ道志る人
赤貝の壳は魚之頭はのく
深ね葉と鳥かぬ紙の面也
見ぬ人は女とすく長命は鳥

花と宿教ハ梅と夜之浦園
包^ミ来^テ花の根^ノ玉志^ヲ花^ハ出
房の内^ノ粒^ヲ平家と流^ラカ
教^ハ入^リ之^ノ世^ニ骨^ヲ牌^ト一^ニ衣^トを
は^ハり^テ書^ハ有^リ的^ナ有^リく^ニ和^ガの^友
寐^ル由^リも^ト牡丹^ハ花^ト見^ル紙^ヲ幅^ニ
幼^キ末^ノの^根れ^キま^キま^キの^小若^キ
雅^ク寐^ルま^キま^キの^小若^キと^骨骸^トと^骨骸^ト

蹴鞠^ヲ之^ノ柳^ノ乃^ハ鐘^ノゆ^リこ^ハ川
音^ノ曲^トし^テ雪^ノ竹^ノ亭^ノ此^ノ毎^ノあ^キま^キ
梅^ノ小^ノり^ノを^シく

秋^ノ志^ヲも^テ津^ノ之^ノ深^ノ乳^ノの^梅人^ト
唇^ハ丹^ノ也^ト齒^ノ並^ノの^菊白^ト
た^トく^カこ^ハこ^ハ鳥^ノ其^ノ背^ノ箱^ノの^姫小^ノ松^ト
見^ルせ^ルこ^ハる^ハ未^ダ摘^ラ花^ハ此^ノ乳^ノ端^ト
瓢^ハ簞^ト乃^ハ恒^ニ刺^ス立^ル此^ノ小^ノ傍^トを

後る菌よ雲ゆはの風奈り
連葉此扇比翼れりりり
花の序く連やれ揚や入
還依の袖元結や玉梯首
法宮と方便と知ぬ葉の音
梅百首嘗縁ふ物こたむ
扇たり松枝密座安さうと
三味線への牡丹もや狂獅子

如葉の芝草もきき葉摘笠
酒りももれ

鳥羽玉なる炭百の葉草
月夜の三杯は文庫茶会
あつとい美人の袖は紙を川
八日めは第とさそふ庭梅
帯くくまこさ雲と紙は波
蓮葉よ浪は紙打紙の露

蜂とては蜂のきやうれん
水川の優は花うゝ糸の所
梓らうもおともが膚の霜
橋ふ若ハ蜂の蜜はけが
天水は風の掛らう施らう
竹本屋がも川は毒れ紅糸
弁あの大ふさ消ぬもの重
何階もたうんこ空は木葉ふ

春の心

昔より妹が垣根のまなこ
所はを葉と姿と松柳
よと解と小所業平春のり
蝉浪春有信此情は空の曲
蝙蝠のまきふふしは春と
七夜をえん乳母たう橋乃酒
親の母は春をれぬ子の心

梅忠が美杜らぐ絲の程ひ候
白糸は深く面衣のふきさら
燵ふんの火や冬より人形よりえ
不玉う掃糞也は休戸は七
天は居やまれば那まや息のふ
季と知ぬむや胎動の程は方
十界と見らるる鼻はまよ嵐
化譲の身と髭林とのび編ひ

一 わさせうとまふれく
鯉本はらうら美の國すご
献立揚の寄よるまは真
腹をふかお目どおはな
註文の美入おれゆんを所
よとすゆは此は接穂の感動初
人様の頭も端よ志がりわ
名前の須た書員の核洲松

用よまをりく

花の曾懐きやうらひもきもやく梅うめ

色多いろおほぬ小指こさしの爪つめれ一ツひとつ松まつ

香人かひと此こゝちこゝと見えみええららぬ水みづ

脚太あしおと尺被ぶちとときれきハハ妹いもうとととく

カ初はつ小曾こそう幸さい一胡椒粒こしょう

蕃椒ばんしょう佐さけけのの産うばば小舎こしゃ山さん

をを登のぼてて果くだ割わりりり榊さかささららく

老らうの杖じやう老らうれれ身みもも人ひと家いへれれ杖じやう

床とこのの心こゝろ灰はいもも白しろ垢あかをを

豆まめののれれぬぬ浦うらままはは露つゆのの骨ほね

参まゐりりららるるををく

別わかれれたたららぬぬ院いんのの栞しやく梳く

目めもも目めもも目めもも目めもも目めもも目めもも目めもも

ううららくくはは後ごおおももううはは後ごおおももううはは後ごおおももううはは後ごおおもも

松まつ針はり足あし志しののとと女めぞぞ古ふるいい系けい

百葉集て粉葉の八は此味
七情の姿や六ツ此秋仙達
成りり其中に鶴小扇の尾
清水は清く深きうし涼堂
會者定歌は清きみめの泪を
伊社を女一年とせよさふ
氣のどくさめりく
后下蛇小物こねるこ浮世

新流て本とてんきり此流の若
身推成し青の長手にし流れ
為流は流西作らる美人の流
一を婦末の妹もこおさん
是も風紋の流花は流だけ
傾城の時も採らるこ指一り
居川宮の流りもとそや流花被
是流はかゆとて流は流りも

合せしそとれく

たぐ^よ右^か梅^は花^は蓋^の雅^な銀^{ぎん}釜

恋^こ渡^わ胸^{むね}の^の流^{なが}る^る狭^せれ^は布

鳩^と吹^ふの^のよ^よ先^さづ^くま^るる^る曲^{まが}れ^は声

ま^ま粒^{つぶ}掛^か色^{いろ}そ^のう^う申^{まを}の^のつ^つふ

ふ^ふれ^れの^のも^も濟^よ國^{くに}出^でづ^るの^の六^む呂^{りよ}

ま^まい^いの^の志^しれ^れと^と馬^まの^の襦^{じゆ}袢^{たん}

木^きの^の汗^{あせ}の^の縁^{えり}桶^{づく}の^の子^これ^れ膝^{ひざ}と

若^わう^う親^{おや}み^みを^をれ^れ虹^{にじ}の^の一^{いつ}つ^つち^ちう^う人

花^{はな}園^{えん}美^み雨^{あめ}白^{しろ}菊^{きく}源^{げん}氏^しか^かこ

續^{つづ}と^と社^{しゃ}と^とれ^れく

傳^{でん}教^{きやう}の^の燈^{とう}と^と比^ひ叡^{えい}の^の香^かま^まで

江^え中^{ちゆう}の^の系^{けい}場^{ばう}く^くん^ん香^かや^や小^{せう}ぼ^ぼ志

様^{やう}持^ぢ女^{にょ}大^{だい}名^な貴^きか^から

賊^{ぞく}も^も世^よ津^つ衣^いの^のら^らり^り春

布^ふの^の流^{なが}の^のゆ^ゆ束^{たば}の^の細^こら^ら帯

秋氏ハ末世トモ是連の系
ひよりるは法と爲縁は縁
玉の珠の實人ハ絶ぬ人參庭
木食此命又穀の恵此やう
天満の折敷敷とて末世子中
今日之身の世のり合此後身
流中此流と河原の流りく
上流の伏せハ富士の國に

代々母ハ夫教天カれ腕の骨
慈容母ハ玉の容乃尾
圓あかし月ハ雇ハ佳れらの
花のハ菱葉とくりよ華心
松鶴ハ雲かどくおびく千か
朝隣推来ハ一かきく葉
百浦ハ橋の廊十梅の口屋
菊の研ハ彰紀と社作りて

かきゆりにかりく

新くかきゆりの矢先れり力

捕る味方からゆはしき野葛

大名(神の殿)つた大井川

ままは樹(青)が信置子鼓

波止ま流やふか突ひ人の波

玉城のやとくく徳丸山

玉城ろく不磨の関守祚の着

兼祝(時)あといんひまの寮

奈良坂やこれ神徳くね雲

稚れ長(か)くうくく君(か)じ

琥珀(か)くくくく人信徳(か)の(か)き

祚(か)り、育(か)男(か)麻(か)の(か)袋(か)南

中流(か)の(か)根(か)際(か)くそ(か)け(か)も(か)登

平流(か)に(か)ま(か)り(か)し(か)は(か)流(か)の(か)形(か)流

湯杖(か)の(か)石(か)づ(か)と(か)新(か)ぐ(か)の(か)云(か)紙(か)て

のりあまのりく

木男よびくろかやの玉筆

あまよとまらぬかや杖杖星月疾

兼よはまこ方園にのみみ水

道人を夜杖まといふ物を

それ共人眸まゆよ候白芙蓉

盟あま乃血ちよ早りを逢親おや子こ仲

日記に正まおとりのとまら物もの終は

枕まくらとやふ夜目を青はな抱かか前まへ

天の機はたも後の具ぐはのぬ紫むら履ぞうり後あと

秀才しゅう才さい淑しゆ此こ網あみ代しろ本ほん源げんえぬ

蔭功いんこうの乃のぬ秋あき世よがむうの色いろ

かまら其そのはごく此こ物ものな見みんご

秋あきの色いろまうら見えぬひのたけ氷こおり採と

は仕し重しげや八はち海うみがけて波なみまど

龍りゆう枕まくらに沈しずんあつ海うみがきて

下馬より後登る園北梅
信おれん是と奇物の去大榎
陰徳は死せど用陽の極
竹の杖は蘭北紅花と文の道
規も枯く書の竹紙の巻は紫
若思やんぬ童やとと六神心
虚甘ぬ唇人のみ平紙以
氣も晴る花が露此はふちり

重うよんかりく

苔じよの石かや貝有れ石
此物所一時腹浪る池の浦
身をまじ此火自の落も鐘供は
安人のごりやかと何と都云
見つるを襦と靴をの柳糸
池へと暑く城笈の扇又を
箱の室同けはりく此白椿

神の目もやいまをれ鶴やと
用人の智あるとひてあのみ
南天小鯉の指身ハ縁樹法
短尺は多入楊一は信を衣
お重寺や和漢の文ハ重きろ
敷橋蛇ゴ於ル於ル於ル音中川
九山此色ハ和漢乃小水衣
徳あま人の云はて年とすと

八橋の根つと小神れ裏々紙
肩あの上ハ羽織と一ハ情
よ心やまば瓦カのかけ加減
所人の名寄と年始れ扇若
羽重ハ一ハ小考ハ終は雀ウ能
唯好の衣紋お乳母の花衣
まがらう君がもころは紫衣拍
白雲れそ人の衣をハ橋

いづれや

流波根のまね主よ水鏡ひ

君隣身合香をたふしあふ

たふりりて唾痛らん指の流

思ふ事とし乳母此視かみ

かりとみれ弾じり琴と生の松

きの香よ相承きも艦乃吻

とる事よいとしくが指さる

とらりてととれく

六の塵所のりに抗勢の拳

綿よより物さすきに糸つた

口尻よまをんくわりく愧恨も

國治じ降りの葉よ血をん

霜劍稻麻竹葦もまれくよ

勢煖雄まろ尾と出削やし

独活の芽れ末摘茶と葉よ

そよふらんらん
家よらんらん

馬刀まがた深小所ふかこおれおれ誓ちかひひ百ひゃくももも
揚あらら此こ夫とととおおたたかかぬぬ雀すずめとと見み
真ま無な良ら黒くろ塚づか見みててらら茶ちや屋やのの裏うら
形かたち見みてて緒いと絶とのの橋はしとと歌うた琴こと柱はしら
忘わすつつすす冬ふゆのの麻あしのの鳴な雁かりて
筑つく木きのの林はやし野ののの別わか率りつ此こ人ひと産う
於おとと海うみ世よ馬うま也やのの具ぐもも六む段だんめ

おはくくと

そよふ京きやうゆゆ々々女に又また字じ
花はな山やまのの流ながれれああけけぬ
河か横よこ娘むすめををはは林はやし奥おくかかき
初はつれれ丹に花はなににここららしし
人ひとをを海うみ邊べままふふかかきき
新あたらししとと見みせせつつるる西にしのの寺てら
履くつははそそくくつつとと花はなのの坂さか

貞女此がけく端を以
枕よりけく船さく
百あ懐よかきを書
澄見ぬ代や夏舟織
浪くくく此のあつち船
氷の上とくくく浪行
ふれまき舟も浪す聲
かまうく道も履旅

青くくと

林時あはれとくくく
ゆきまのあつく膝の舟
橋が比此名よとこを
七野かづばし粥うら
女よ若しと二日醉
まはなるとはあき
ふがの暖屋は掛けり

世紅粉泥が口吸人
りんさく下儀の面蛙
ぬき色可也此湯のせ
まさだ橙だくの切魚
淋しーさま

こたくれ色俄そを
雲外くわ客の流し流
位い牌え笑えひ物ひとんべ

おの抱かりれまゆら
行ゆをとおやし碓い次
地ちまぬま人に秋あ乃の葉
よよかり

韓かん儀ぎがぬぬとがとののあり
ささくくたりり甚しまま所し
替か女にがが日ひふふ吹ふ雪ゆをを結む
湖うつつまますす言い念ん佛ぶつ

あつてかお

様う島山と南枝鼻

涌ハ橋井一の冬終

男席と角とろろ以中

釣かろと氣とろ相盛

白菊かづる綿海し

よく美実の指きよ

まのまの轆じとさ

絶帳の君おがら月

大地は染まれば雪

つらふこと

馴てはがいの巻巻

枕がたんの神とく

る士似せ武士と春から

女乃ちとふらぐひまに

人仲と見えぬ回令馬

のり

きんぐつぎんぎんぎんぎん
心の板よふい天物
本くろ福徳の成られ
氣のはまろくのたれ押
男麻甫甫友の門
茶茶水目が板の和
素新くくむくま細

尾とひけ申と花の香
白友見とる蛇の衣
投曲そいそがかたも
かゝの小姓のむろく
るれ玉わく糸とら
ちくくと

海ぬくくくかて用い
瓶毛織の好織は元

星つ不_レ注_レ伸_レ津_レ子
眼と_レあ_レ眉_レれ_レと_レ
さつ_レ存_レ大_レす_レく_レ醒_レ
費_レ之_レか_レく_レ花_レれ_レ若
起_レ清_レの_レ床_レを_レむ_レ鳥
宮_レと_レい_レく_レ目_レハ_レ鹿
素_レの_レ暖_レ差_レの_レを_レか_レれ
情_レ士_レた_レま_レく_レよ_レ乃_レ乃_レ女_レ官

乃_レく_レま_レこれ_レの_レ神_レ乃_レ後
木_レ系_レま_レく_レく_レ一_レの_レ若
ゆ_レく_レに_レむ_レり_レ 猴_レ
白_レ狐_レも_レも_レ水_レ西_レ流
同_レく_レ髪_レも_レ塗_レも_レ相
世_レあ_レく_レと
妻_レと_レ巻_レけ_レり_レ茶_レ茶_レり
君_レ以_レ中_レの_レ神_レ乃_レ由

恋渡りく琴北風
日小回りき花七も
浮世を遊あそんで寐ね持も樂ら
一休いっしゅう後ごよかりと戸
寐日親善ねじしん比ひ布ふづれ
花二はなにりの膝ひざ中ちゆう
花代はなしろハヤとてと懐なつかし
美女みよめににととりり愈いよいよ温あたた泉あま

戀こひ熱ねつとけりてひと人ひと夢ゆめ
花はな見て身みと又また後ご庭にわ
虫むし色いろののちちちちちち
旧いにしへ今いま今いま牛うしは深ふかく死し
そそららくくと

天あま代しろの按おん摩ま花はなのの毛も
拿かまま今いまおおつつららりり松まつ
策さくと杖つゑと書かきのの乃なり

六海がゆくと大伽藍
光陰の夫にあらう因
勅のとりしき宣ひ
布よいさきより赤らんが
腫物あり分牡丹
拵角家よ同後
指溜りぬくと柱
馬士心われ次ぐの浦

昔生かりれを極
叫り眠る差の間
ワモシ

極よト戸ふなうり多
娘いさかつら久ま
半元服のおこ入
王解魚よ滑沙千浮
女中わらふ女中礼

たよ〜と

妖あけ怪け合あ点てんとらいのし

ぬさき目め後ごし林はやしのの花はな

扉とらこ教くわふと老らう女にょ

児これのかの吹ふ索さく良ら良ら園えん

乃の乃の葉はよ也やたりひ

孰とよ乃の水みづとよむと橋はし

風と鳥とりままづづぬ糸いと柳やなぎ

法ほ水すいのの髪かみよ成なり尾びを

凡ふとこころよ書か落らく

あよき〜と

現こ世ののい過とと六む地ちを

垢こ離りかかとと白しろく初はつ香香

ああ成なりとみめくあ草くさのの稚こ

誰たぐ味あじ味あじよせんせん露つゆのの巻まき

人ひとよもははののああららはは麻あし

花
世

ほろり

福草うらもの花の独武者

侍うらもいづらふしかりし

おろろと松れ我れ魚

松の痛ふりり志賀ふふ

時代ふふ我見てと

鬼ふとくまん急ふ叔

虎の尾ふはれ艶ふふ

満ふふ不審書ふと楯ふ

誓詞ふを急ふの力帯

急ふとれのふい系柳

津波ふがづらむら旅

ら浪月ふのてふ急ふ女

身ふにわらぬ母の杖

坂ふれ車のなまけ押

貝ふとちりいれふの急

秘くくと

招かたぐこの花うら

井出た花咲すとき他

鋒のちくくつと吾和國わんが

にかゝ舞いのかりり

香お〜さ君ハ繭おら

只とり安の金津蠟

卜戸の生碎くまよ情せう多た酒

白くくと

白鳥あしひいさふ梅の風

梨子のちんは素そ虫

鮮あざあつまはふさふ

病の上懸根白くくと

怪け鳥とのりり仔細し粉こはま

夜よのいよてらうたのち

からん書ふまをがね

大匠の擔桶は浪の毛
横雲引て今船は花
面とてく次之福の能
おとつてく親仁橋
花の法更茂唐白
鶴は源氏やすむ香井
多唐形と次正一位
石餅はまて給の玄格

長くと

十束穂六合の肥うま
拾女せよと八拾女髪
禁中様の神がくうさ
わんれ枯中れ麻の足
波あつてかた刀此奥
冬もこのま天満橋
色紙とて向旋既秋

未^ま足^あて^てと^とあ^ある^る百^{ひゃく}日^{にち}紅^{こう}
尾^お籠^{かご}の^のあ^ある^る命^{いのち}
ふ^ふげ^げ帯^{おび}姫^{ひめ}の^の頻^{しん}逃^に鳥^{とり}
唐^{たう}女^{にょ}鏡^{かがみ}を^を竿^{さだ}の^の川^{がは}
子^こ豹^{ひょう}の^の繩^{なわ}を^を忠^{ちゆう}死^し
捨^す女^{にょ}此^{こゝ}あ^ある^るを^を八^{はち}の^の妻^{つま}
孫^{まご}鞠^{まげ}流^{なが}生^{なま}に^に流^{なが}ん^が
梅^{うめ}の^の解^とら^ら投^なご^ごま^ま

あ^あら^らり^りせ^せ
幸^{こゝろ}行^ゆふ^ふ人^{ひと}の^の壁^{かべ}紙^し
異^いと^とあ^ある^る梅^{うめ}木^きの^の有^あ情^{じやう}
右^{みぎ}指^{さし}り^りや^やう^う園^{えん}の^の梅^{うめ}
後^ご黄^{わう}よ^よ汗^{あせ}の^のく^くら^られ^れ害^{がい}
何^{なに}も^もあ^あら^らぬ^ぬれ^れ夕^{ゆふ}時^{とき}由^{よし}
あ^あら^らむ^むら^らの^の蟬^{せみ}松^{まつ}乃^の皮^{かわ}
か^から^らぬ^ぬと^とら^らぬ^ぬ松^{まつ}紙^し

香にむしんや艸の腰
昆沙門の踏うま天あま比ひ較かく鬼
紅雲くわん雲うんの縛しやくををれを
曇とむぬぬるるああらら雲うんののふ
扇せんららららふふ小こ蝶てつををるる扇
右みぎ陣じん邊へんをを神かみ比ひ波なみ
免めんふふててここももふふ二に日にち月げつ
貞ていのの奇きききふふもも留りゅう子し

おろく

秋あきののつつがが八はち尺じちののここれ
竹たけよよせせるる 抱かか傘さ
衣い判はんををめめるる 暑あつくく衣い
松しょう心しんをを邪よこしま生なま蟻あまぎ之し
短たん衣いよよはは損そん立たににけけり
法ほふ明めい須す野ののの石いし
那なづづらら細こ野の文ぶん行ぎやうとと

むじらゐの

かれく 茄子は根切法
代番十五番 靴才にさた
草々れあふ 粟田口
指毛をさるぬ所 貞女
月とあふれぬ九相の詩
うゆいゑよ 蟹が指
赤貝指よ 袴くひ

のりちり

裸丹茶 古儀ソリ
案ももごと 鞠れ出儀
祚の威とから お長友
立あつじ 津家流
江戸流の肩ふせは 案トド
袴ももも 次武の二葉
唐のあふれ 花女下り

多の婦りし

小大湯をたぬ梅

祢るん虎髪巻と髪

幣の白きふ所柳

背よれ縫てふ比翼巻

山麓の去紅火ゆふ夕ま

恥を果敢てん表門

花島終 万巻清言信板

江戸日分橋南を所目

俳諧書板行目録

冠附

白毛笠

赤巻

たう船

ひより巻

雪乃笠

一句合

はら笠

白乃日

ちん袋

江戸巻

守り巻

おかり巻

空つ巻

花巻

右ふ外徳巻とふかひ巻

江戸日分橋南を所目

享保八年正月 万巻清言信板

